

論 説 の 部

「学 習 者」 で あ る 成 人

足利市教育委員会 社会教育課 清 水 邦 康

社会教育は、青少年から、壮年・高令者に至るまで、幅広い年齢層を対象にしている。

なかでも、子供をもつ父親、母親、地域の婦人、高令者など、成人を対象としたさまざまな学級や講座などの、いわゆる成人教育は、社会教育の主要な部分でもある。

我々がすすめている成人教育の原則は、つぎのようなものである。

「成人に対する教育的営みは、ある内容を教育者側の意図にもとづいて教える、というかたちでなく、学習者が自らの意志によって行う学習活動や、その学習効果を高めるための物的、内容的なサービス提供ないしは媒介的な役割をもって、学習活動に対応する営み」

成人は、成人であるが故の心理構造をもっている。それは、成人が学習するにあたって、ある特質を表出させることになる。

本稿においては、成人学習者がかつ心理的特質をいくつか明らかにするとともに、それらに対応した社会教育の手法についてもふれてみたい。

〔成人学習者の心理的特質〕

① 多分に現実主義的な学習者

社会教育に登場してくる成人の学習要求が、かなり現実的であるという事実を、我々は体験的に知っている。それは、学習の具体的な効果への期待が非常に強い、ということである。

すぐに日常生活に役立つものや、子供の教育に反映できるものなど、その期待は、実に機能的である。人々の求めているものは、具体性と即効性に富んだ学習内容なのである。例えば、公民館における家庭教育学級の母親の求めるものは、「なぜ子どもが非行に走るのか」ということより、「どんな母親が非行少年をつくってしまうのか」という学習内容なのである。

論理より、当面の自分への課題に答えうる学習こそ、成人の最も求めているものである、といえるのであろう。

なぜであろうか。一つの答えとして、つぎのようなことがいわれている。

成人にとって時間の観念は、青少年のそれとは多分に差異をみせている。成人にとっては、時間は、限られたものとしてとらえられている。年をとるに従って、時間は減ってゆくもの、という観念に変わってゆく。そのため、将来的な見通しをもって学習効果をまつという、心理傾向にはなりにくい状況にあるのであろう。そのことが、実は、成人学習者を、具体的かつ即効性をもつ学習志向へと導く一つの要因になっていると思われるのである。

以上のようなことをふまえると、社会教育の技法のなかで、体験的な学習としての、実習、観

察、見学などを多くとり入れて、学習内容を現実の日常生活の場に生かせるような配慮が、きわめて重要になってくるのである。

② 多分に生活者である学習者

成人にとって、学習することは本務ではない。学習よりもっと重要なことは生活することなのである。成人になることは、生活するうえでの役割が明確化することであり、生活上の責任を負うようになることである。学習することが本務である、児童・生徒とは決定的な条件的差異がある。その意味で、生活そのものが、成人にとって学習の阻害要因となっていることは確かである。

例えば、父親学級の受講者にとって、夜間に開かれる学習会と、仕事が重なったときに、どちらをとるかといえば、答えは明らかである。

社会教育の原則は「自発的学習」であり、そこには強制力は全く作用しない。義務教育ではないから、それに参加する、しないは全く本人にかかっている。自らの意志で学習を開始、また止めることも自由に可能なのである。

強制力不在の学習活動に、学習者をひきつけ、学習の効果を高めることは非常な努力を要する。それでは、そのような成人に対しては、社会教育はどのように対応してゆくのであろうか。

その一つの手だてとして、社会教育では、共同学習、相互学習の組織化により、互いに刺激し合っただけの学習活動が展開される場合が多い。成人にとって学習活動に参加することが、多分に自律的行為であるとするならば、さらに学習の過程のなかで、より自律的な学習者に育ててゆくことが、重要な意味をもってくるであろう。なぜなら、学習者にとって、学習することの重要性への認識は、自分自身がより自律的学習者となってゆくときに高められるからである。

成人にとっては生活が本務である。しかしながら、その事實は、社会教育が、人びとの生活上のさまざまな課題に対応した、生活に根ざした教育活動を展開できるという妙味をもまた与えてくれるのである。

生活者である成人に、しばしば生活上の理由による障害がおきうることは、すでにわかった。

生活するために学習活動に参加できない人びとは数多い。そこで、我々は、ここで成人にとっての「個人学習」についても充分吟味しなければならない。学習することは、まさしく個人の行為であることは確かである。形態として集団学習の形をとっていても、学習するのは個人でありすべては自分にとっての学習なのである。それ故、成人への学習援助は、個人学習への援助活動を抜きにしては語れないであろう。なかでも、社会教育における学習情報提供、学習相談などの機能をより充実させ、個人学習への十分な援助活動を展開することは、実に重要である。とりわけ、現代社会においては、数多くの情報メディアが存在し、学習の機会は豊富であるといえる。

そのなかで正しい情報選択や、その調整は重要となり、そのための機会を設定する必要性は大きいものがある。

③ 多分に生活経験豊富な学習者

成人は、多くの知識や、身につけた生活経験をもっている。では、そのような知識・生活経験

は、学習にどのように作用するのであろうか。

成人にとって学習することは、ときに過去に得た知識や経験に決定的な修正を強いられることになる場合がある。それは、実に成人にとって苦痛になるし、また不快な現象でもあるだろう。

しかし、新しい知識を得るための学習は、決して過去の知識、経験を全く否定するわけでない。学習にあたっては、それらを新しい学習活動にどう結びつけてゆくかが非常に大きな意味をもってくる。

すでに得た知識、経験からの応用的な創造、誤解の解除による新しい知識の獲得などを、さまざまな学習方法によって行ってゆくならば、学習者のもっている生活経験、知識は有効なものとなり得る。

つぎの例をみてみよう。乳幼児をもつ母親を対象とした学級における「私の子育て」というテーマでの小グループ話し合い学習の場面である。そこでは、実に活発な話し合いがなされ、終了後の各自の感想として、つぎのようなことを聞くことができた。

- ・今まで、私は自分の子育てにずいぶん自信をもっていました。他のお母さんの話を聞いて、私自身のおやまりに気づいた点がたくさんありました。これからは、この話し合いをもとにして、また私自身の新しい子育ての考え方をくりだしてゆきたい。
- ・子どものほめ方、叱り方のひとつをとっても、それぞれの母親で、かなりのちがひがある。自分で判断して、よい方法はどんどんこれからも参考にしたい。

これらの感想を聞くと、母親たちが、それぞれの経験や知識をもとにして、他の人びとの様子を聞きながら、新しい自らの考えを確立しようとしていることが伺えるであろう。

多分に生活経験豊富な成人学習者は、また、きわめて学習効果のあがる学習者となり得るのである。

④ 多分に自信と誇りをもつ学習者

「未知の分野への挑戦」は、成人が学習するときの心理的状況の一つである、といわれている。学習することが本務でない成人にとって、学習への不安は当然として、そこにおける失敗や、無知はあり得ることである。成人は、すでに自分が一人前であることを十分自覚し、また誇りももっている。とくに、学習参加志向の成人は、自らに肯定的であり、前向きの人びとが多く、自分に自信と誇りをもっている人びとが多い。

そのような成人学習者に対しては、指導者との相互尊重の関係が不可欠となってくる。このことは、学習者同志についても、またしかりである。指導者自らが、学習者に対して、一個の完成された人格として対することは、重要なこととなってくる。

このような事実は、学校教育における教師と児童・生徒という関係とは、きわめて対照的である、といえるかもしれない。

社会教育では、学習者の自信を失わせたり、誇りをきづつけたりするような状況がおこらないよう、指導者も、学習者自らも配慮した学習風土の形成は必須条件であるといえるだろう。

⑤ 多分に自分を大切にしている学習者

成人の自己自身観は、かなり確立されている。物事の解決は、その自己自身観によってあたろうとする。学習活動においても、また同じである。他人が設定した目標より、自分で設定した目標への志向は強いものがある。目標志向が強いということは、学習活動においては、より効果が得ることができることにつながってくる。すなわち、明確な学習目標を、学習者自らが確立しておくことが、社会教育では期待される。それは、学習内容への目標とともに、「学習する行為」に対する自己自身観を、どのようにもっているか……ということである。自分を生かした、自己のイメージを明確にもつことが、自らの学習姿勢をも形成してくるのである。自分を大切にしている成人こそ、実は確かな目標をもった学習者となるのである。

社会教育のもつ大きな課題の一つは、学習活動不参加の人びとに対して、「学習する行為」をどう自己認識させるか、である。日常生活のなかで、学習の必要に気づくことが、成人にとっての学習活動の出発点だからである。

成人は、多くの心理的特質をもっている。社会教育では、生活者である多様な側面と心理構造をもつ成人への教育活動がおこなわれている。成人のもっているさまざまな行動、心理要素は、ときに、学習活動への阻害要因になってくるし、反面、学習効果を高めるうえで、非常に有効な場合もある。これらの諸要素、条件にふまえて社会教育は最も有効に機能しなければならないのである。

社会教育のめざす大きなものは、それぞれの人びとの生活に根ざした、人びと自身による学習活動の推進である。それは、教育というより、むしろ人びとの学習活動への援助、指導といった方が適切であろう。

〔参考・引用文献〕

- | | |
|--------------|---------------|
| • 日本人の学習 | 辻 功 他著 |
| • 現代社会教育用語辞典 | 日 高 幸 雄 他編 |
| • 成人の発達と生涯学習 | 三 浦 清一郎 著 |
| • 生涯教育と社会教育 | 日本生涯教育学会年報第4号 |